

バトン

瀬川 智美子

かれこれ二十年前。当時二十代前半だった私たちは、会社の旅行で北海道網走を訪れた。夕食の宴会場を抜け出したオン五人組。私たちの住む青森には日本海・太平洋・津軽海峡はあるが網走といえはオホーツク海。一丁前に「オホーツクの味」なんてものを求め夜の街へ繰り出したのだ。

当時はロコミサイトなどなかった。すこぶるカンを働かせ、ピンと来たお寿司屋さんへ飛び込む。青森から来たことを伝え、「オホーツクの海ならでは」というものを食べてみたい、予算はひとり千円で」。そんなお願いをした。(ランチどきでもないのに！)

今思えば背筋がゾツとするような凶々しき、若気の至り。

おかみさんにはっこりとうなずき、小上がりへ案内してくれた。

驚いた。目の前に運ばれてきたお寿司は、メニュー表に載っている「特上」の写真とほぼ同じ、それもしつかりと五人前。豪華だった。

てつきり、出されるのは二人前くらいのもだろうと高を括っていた。ジャンケンでもしながら分かち合おう、それも旅の思い出だね、と笑い合っていたため、キョトンとする私たち。

「お姉さんたち、お酒、好き？」

人懐っこい笑顔でおかみさんが聞く。

「す、す、好きです」

なんと、ビールと地酒まで頂いてしまった。

厳しく冷たい海水でピリツと身が引き締まった北国の魚たち。どっぷり蓄えた甘みと絶妙な歯ごたえは、たるんでいない味。若気の至り五人組は、「にまあ〜」。ただただ顔を見合わせ、とろけた。写真を撮ることも忘れたし、日記に書きとめもしていないが、この時の味は今でもしっかりと私の記憶に刻まれている。思いがけないおもてなしに触れ、胸を打たれた。期待以上の喜びと感動に心ふるえた時、とりわけて記録に残さずとも思い出は深く心に刻まれる。

「時間まだ大丈夫？ カラオケ行こうか、私のおごり！」

なんとなんと、閉店後おかみさんは馴染みのスナックに連れて行ってくれた。

ワイワイと楽しむ私たち。思う存分はしゃぎまくるだけはしゃぎきって、ふと我に返り恐縮する。

私たちが支払ったのはお寿司屋さんでの千円×五人分だけ。いくら若気の至り五人組とはいえ、さすがに申し訳ない気分になってきた。そんな心を読み取ってくれたおかみさんは、私たちが差し出すお金を財布に戻すように、というしぐさをしながらこんなお話を聞かせてくれた。

「ずいぶん前になるけど、青森へ行ったことがあるのよ。出会った方がとても親切にしてくれた。いい人に出会えてラッキーな旅だったし、青森が大好きになったの。その人は旅先で、たまたま知り合った現地の方におもてなしを受けた思い出があるらしくて、自分がしてもらって嬉しかったことをしているだけだから遠慮しないで楽しんでね、と言って下さったの。今になると、あの頃はお礼の仕方わからないほど若かったなああってつくづく思う。お言葉に甘えてさんざんお世話になっておきながら、住所すら聞いてこなかった。あとからお礼状を送ろう、というようなことにまで気が回るようなタイプじゃなかったのね。こうしてあなたたちが楽しいって喜んでくれるのを見て、あの時お世話になった方への恩返しをやっと果たせたような、そんな気がする。胸のつかえが取れたわ。今日は付き合ってくれてありがとう」

あっぱれ、と思った。心がシビレた。おかみさんが大好きになった。すっかりおかみさんのファンになった私は、その後も網走を個人的に訪れている。これからも、何度でも行きたい。

旅のかたちは数あれど、一度訪れた先へまた行きたいと思わせるいちばんの要素は「あの人にまた会いたい」なのではないかと、私は思う。

さて、お会いしたこともない「親切な青森のどなたか」のおかげで思わぬ恩恵を受け、さんざんはしゃぎまくったうえ「付き合ってくれてありがとう」とお礼まで言って頂いたわけだが、どうしても気が引けてしまいモジモジする私たち。

「そんなに気になるなら、そうねえ、あなたたちが私くらいの年齢になって自分に余裕が出来た時、もし受け取ったこのバトンのことを覚えていたら次の誰かに渡してくれたらね、そうね、そうやって繋がって行ってくれたら私は嬉しいわ」

決して押しつけがましくなく優しくおっしゃり、見送って下さった。

「バトン」

おかみさんの言葉が私の心にすんなりと沁み渡った。

おかみさんから受け取った恩返しของバトンには『本物のおもてなし本物の思いやりとはこういうものです』と、説明書きが添えられているみたい。なぜなら、自分のことに精いっぱい心が弱っている時、「こんなにしてあげたのにお礼も言わないなんて」。見返りを期待してしまいつついい心乱れる時、托されたこのバトンを心の引き出しから取り出し眺めると、心が救われ、あたたかい気持ちになれるから。

してもらって嬉しかったご恩を

- ・自分に余裕のある時に
- ・自分が出来る範囲で
- ・それを必要としている
- ・目の前の誰かに返す

(注) 自分に無理をして行うべからず

見返りを期待してしまうような行いは恩返しリレーに違反する

あれから二十年。私は自分なりに作ったルールと照らし合わせながら、綱走のおかみさんから預かった恩返しของバトンを私が出会う目の前のあなたへ、渡していく。

そして、もうひとつ。あの綱走の夜に私は気付いた。

『嬉しい時は申し訳ない顔はしない方がいい』

素直に感謝の気持ちを表し、大いに喜ぶのがもてなしてくれる相手に対する最大の礼儀なり。